



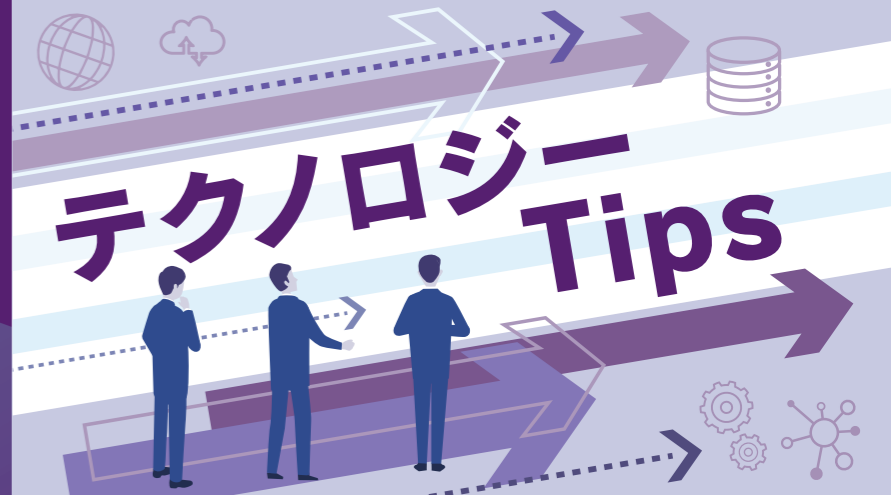
AIの活用が広がる中、「AIを導入したのに成果が出ない」という声も増えています。その原因の多くは、AIが参照する「データ」の問題にあります。

今さら聞けない「データベース」!

AI時代!「置き方・作り方」で、会社の生産性は劇的に変わる。

AIは優秀な料理人のようなもの。

食材(データ)を正しく整えなければ、おいしい料理(=正しい答え)は作れません。今回は、その土台となる「データベース」について、基本からわかりやすく解説します。

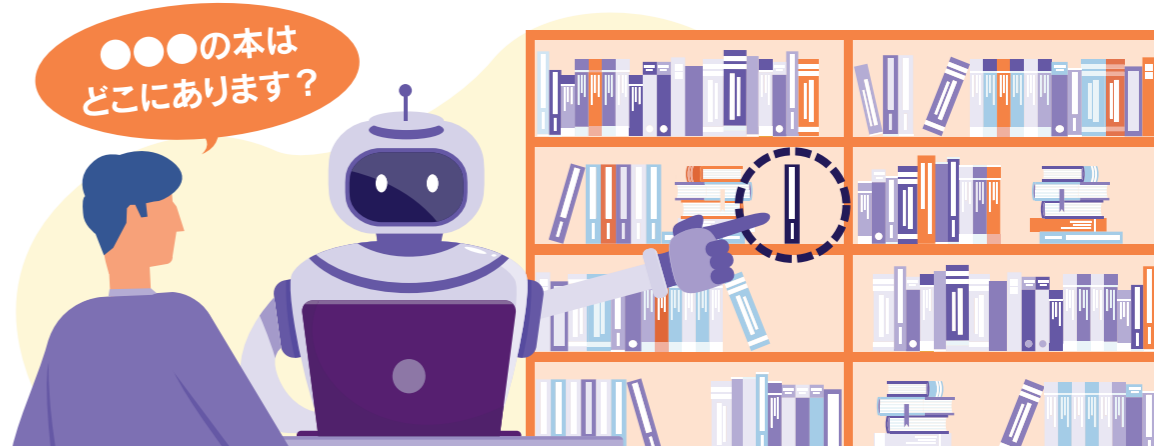


1. データベースとは?

データベースとは、「情報を整理して保管し、必要なときにすぐ取り出せるようにした仕組み」のことです。



身近な例でいうと、図書館をイメージしてください。図書館では本がジャンル別・著者別に整理され、検索システムで目的の本をすぐ見つけられます。もし本が床に山積みだったら、1冊探すだけで何時間もかかりますよね。データベースは、会社の情報を「図書館のように整理された状態」にする仕組みです。顧客情報、商品情報、売上データ、在庫情報など、会社が日々扱う情報をルールに従って格納し、誰でも・いつでも・正確に検索・集計・活用できるようにするのがデータベースの役割です。



2. 「Excel管理」とデータベースは何が違う?

多くの中小企業では、顧客リストも売上管理もExcelで行っていることが多いかもしれません。Excelは手軽でとても便利ですが、データ管理の観点では大きな限界があります。



Excelの課題

- 同じファイルを複数人で同時に編集しにくい(「○○さんが開いています」問題)
- 担当者ごとにファイルが分かれ、「どれが最新?」がわからなくなる
- 入力ルールが統一されず、「株式会社」「(株)」「(株)」が混在する
- データが増えると動作が重くなり、壊れるリスクも高まる
- 人によってフォルダの場所やファイル名がバラバラ



一方、データベースでは、一つの場所にデータを集約し、入力ルール(「全角カタカナで入力」など)を強制でき、複数人が同時にアクセスしても競合しない仕組みになっています。例えるなら、Excelは「各自が持っている紙のノート」、データベースは「全社共通の台帳システム」です。会社が成長してデータが増えるほど、「ノート管理」から「台帳管理」への移行が重要になります。

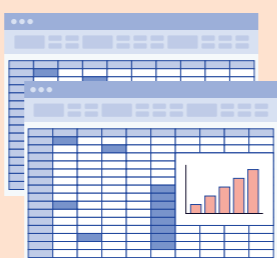
	データベース	VS	エクセル
主な用途	データの管理や検索		表計算
データ入力方法	専用フォームなどからデータを追加		セルに入力
データ保存容量	大量に保存可能		1シートの保存件数が決まっている

3. データベースの種類 — 中小企業に関係あるのは?

データベースにはいくつかの種類がありますが、中小企業に関わりの深いものをご紹介します。

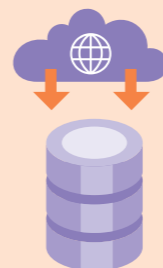
リレーショナルデータベース (RDB)

最も広く使われている形式で、データを「表(テーブル)」で管理します。顧客テーブル、商品テーブル、受注テーブルなど、複数の表を「関連づけて(リレーション)」組み合わせるのが特徴です。身近なところでは、会計ソフトや販売管理ソフトの裏側で動いています。



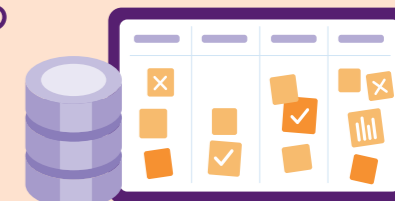
クラウドデータベース

自社にサーバーを置かず、インターネット経由で使えるデータベースです。kintone(ノーコードで構築可能)などのクラウドサービスは、この仕組みの上に業務アプリを構築しています。初期投資を抑えられ、中小企業にも導入しやすいのが特徴です。



ノーコード/ローコードのデータベース

最近はプログラミング不要でデータベースを構築できるツールも増えています。Notionなどは最近のトレンド化しており、導入事例が増えてきています。ITの専門知識がなくても業務データの整理を始められます。



4. データベースを整備すると仕事はどう変わる？

1 「探す時間」が劇的に減る

営業が顧客情報を探す、経理が過去の請求書を確認する—こうした「探す作業」は1日30分～1時間にもなると言われています。データベースがあれば、検索一発で必要な情報にたどり着けます。



2 「属人化」から解放される

「あの情報は〇〇さんしか知らない」「〇〇さんのPCにしかない」という状態は、退職・異動の際に大きなリスクになります。データベースに集約すれば、誰でも同じ情報にアクセスでき、業務の引き継ぎもスムーズです。

3 経営判断のスピードが上がる

「今月の売上は？」「どの商品が伸びている？」「どの顧客の取引が減っている？」こうした問いに、データベースがあればリアルタイムで答えられます。勘や経験だけでなく、データに基づいた意思決定ができるようになります。

4 AIやDXの土台になる

ここが今回の最大のポイントです。次のセクションで詳しく解説します。

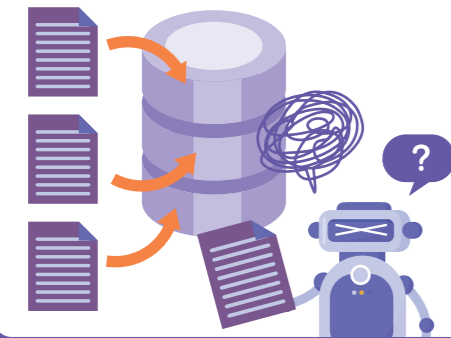


5. AIとデータベースの関係 ---データが正しくないAIは無力になる---

AI時代において、データベースの整備は「あると便利」から「ないと始まらない」に変わりつつあります。AIは人間の何倍もの速度でデータを分析し、パターンを見つけ、提案や予測を行います。しかし、AIが力を発揮するには「正確で、整理されたデータ」が大前提です。



よくある例を挙げましょう。



AIに「売上予測をしてほしい」と頼んだとします。しかし、売上データがExcelのあちこちに散らばり、入力形式もバラバラだったら、AIはまともに分析できません。あるいは、顧客データに重複や誤りが多ければ、AIの出す提案も的外れなものになります。「ゴミを入れればゴミが出る (Garbage In, Garbage Out)」—これはIT業界の有名な格言ですが、AI時代にはさらに重要な意味を持ちます。AIという高性能エンジンを積んでも、燃料(データ)が粗悪なら車は走りません。逆に言えば、データベースをきちんと整備している会社ほど、AIの恩恵をすぐに受けられるということです。データ整備は、AI活用の“先行投資”とも言えます。

Column

AIが「食べる」データの品質チェックリスト

- データの形式は統一されているか？
(日付、住所、会社名の表記など)
- 重複データはないか？
(同じ顧客が複数登録されていないか)
- 最新の情報に更新されているか？
(古い住所、退職済み担当者など)
- 誰がいつ更新したか記録が残っているか？
(ログ管理)
- アクセス権限は適切か？
(見せてよい人・ダメな人の区別)

6. 中小企業が今から取るべきアクション

最後に、明日からの実務に落とし込むと、優先順位は次の通りです。

1 まず「どこに・どんなデータがあるか」を棚卸しする

顧客データ、商品データ、売上データ、在庫データなど、社内にどんなデータが、どんな形式で、どこに保管されているか。まずは現状把握から始めましょう。



2 「正本(マスターデータ)」を決める

同じ顧客情報がExcel、名刺管理アプリ、会計ソフトに散在していませんか？「この情報の正式版はここ」というマスターデータの置き場を決めることが第一歩です。



3 入力ルールを統一する

住所の書き方、会社名の表記、日付の形式など、小さなルールの統一がデータ品質を大きく左右します。



4 小さく始める ~まず1つの業務から~

いきなり全社のデータベースを構築する必要はありません。まずは顧客管理や案件管理など、1つの業務からクラウドツール(kintone、Notionなど)で始めてみましょう。



最後に、**整理します!**

データベースというと難しく聞こえますが、要は「会社の情報を、正しく・整理して・みんなが使える状態にしておくこと」です。AI時代において、これは特別なことではなく、経営の基盤そのものになりつつあります。



データを整え、小さく試しながら、AIを少しずつ現場の力にしていこう。その第一歩が「データベースの整備」です。

当社がしっかりご提案、導入サポートいたします!

まずは
と
当社にご相談ください!

